

令和6年平和祈念滋賀県戦没者追悼式 知事式辞

今年も残すところひと月となりました。本日、多数のご遺族ならびに御来賓の皆様をお迎えして、令和6年平和祈念滋賀県戦没者追悼式を執り行うにあたり、まず、戦没者ご英霊の御霊に対しまして、滋賀県民を代表し、謹んで哀悼の誠を捧げます。

先の大戦が終結して79年の年月が過ぎました。この戦いでは、滋賀県出身の32,715名もの尊い命が失われました。遠く故郷を離れ、祖国の安寧を願い、愛する家族を想いつつも、壮絶な戦場に倒れ、傷つき、あるいは飢えや病に苦しみながら多くの方が異国の地で亡くなりました。さぞかし痛かったでしょう。苦しかったでしょう。

肉親やご家族を失われ、残された御遺族のお気持ちや、戦後の塗炭のご苦勞を想うとき、今、なお、悲痛の念が胸に込み上げてまいります。戦場で散華された夫君に、お父様に、一目会いたいと涙された方も多いでしょう。

国のために命を捧げられたにもかかわらず、残された子らに心なくも差別の視線が向けられた当時の社会の状況もただただ寂しく腹立たしく思います。

これからも、御遺族の皆様寄り添い、戦争の悲惨さと平和の大切さを伝えるために、ともに歩んでまいりますこととお誓い申し上げます。

今、私たちが当たり前のように享受している「平和と繁栄」は、戦禍の中で亡くなられた多くの方々の尊い犠牲の上に築かれていることを決して忘れてはならないと、深く心に刻みます。

世界情勢をみますと、ウクライナやパレスチナ・ガザ地区では、罪な

き幼い子どもまでもが攻撃にさらされ、多くの命が犠牲になっています。また、各地で、今もなお、紛争や暴力が続いています。このことは悲しく、残念なことです。戦争は始めることより、終結させることの方がはるかに難しいと言われます。一日も早い停戦を、皆様とともに願います。

私自身、いや、私の親の世代も戦争を知らない世代です。そういう世代が知事や議員を務める時代になりました。かの戦争がどんどん遠くなるようです。悲しみを共有するため、これまでから、滋賀県遺族会主催の海外や沖縄での戦跡慰霊巡拝にご一緒させていただいております。今年、8月15日、日本武道館での全国戦没者追悼式に参列させていただき、310万人にも上る戦没者の皆様に悼むとともに、平和をつくり、守る決意を新たにいたしました。

8月19日には、県内の戦没者の慰霊のために膳所公園に建立されている「滋賀県戦没者英霊塔」の周辺を、滋賀県遺族会の皆様と一緒に清掃させていただき、そのもとにございますご英霊の位牌に手を合わせました。

また、厚生労働省においては、戦没者の遺骨収集事業の一環として平成15年度より身元特定のためのDNA鑑定を行っておりますが、この度、滋賀県出身で旧ソ連抑留中に戦病死された方のご遺骨と、その方の甥の方との親族関係が存在するとの結論が得られたため、11月18日に県の担当者が厚生労働省からご遺骨を預かり、当日に私の手からご遺族に伝達し、故郷にご帰還いただきました。収容所で戦病死されたのと、寒い大地、遙か異境の地に永く眠られ、望郷の念、久しかったことと察し、私も感無量の思いがいたしました。

なぜ、人間は愚かな戦争を引き起こしてしまったのでしょうか。なぜ、これだけ多くの犠牲を払うまで戦争を終わらせることができなかった

のでしょうか。

広島に、長崎に。唯一被爆国として二度と核兵器が使用されない世界をつくるために私たちがなすべきことは何なのでしょうか。

戦没者のお弔いやご遺骨の収集さえできない隣接する国々との関係をどのように修復し、構築していくべきなのでしょうか。

沖縄にこれだけの米軍基地が集中する現状をどのように乗り越えていくべきなのでしょうか。

今、自分自身に問いかけています。

そして私たちができること、やるべきことに全力を尽くします。

戦後、わが国日本は、一貫して平和国家としての歩みを進め、歴史の教訓を深く胸に刻み、世界の平和と繁栄にも力を尽くしてきました。まもなく戦後80年の節目を迎えます。もう一段、高めていく必要があるのではないのでしょうか。

歳月がいかに流れ過ぎても、悲惨な戦争を二度と繰り返さないために、その記憶を風化させることなく、わが国が歩んできた歴史を省みながら学び、未来へ繋いでいく使命を果たしてまいりたいと存じます。

本日のこの追悼式では、子どもたちによる平和メッセージの発表や、合唱の披露もごさいます。戦争の悲惨さと平和の尊さを次の世代に語り継ぐとともに、誰もが安心して心豊かに生きることができる湖国・滋賀を引き継ぐため、さらに努力を積み重ねてまいりますことを、ここに固くお誓い申し上げまして、式辞といたします。

令和6年12月1日

滋賀県知事 三日月 大造

